

(附編) 国衙と布目瓦

松井田町文化財調査委員 上原富次

国衙と言えば、近世における村落としての国衙よりも先に、律令制度による国衙を思い起こす。ここ松井田町大字「国衙」もご多分に漏れず、その地名に魅せられて来訪する研究者は多い。しかし、今までに律令制における国衙と結びつくような物証は何一つとして発見されなかった。

上野の国衙、即ち、上野の国の国司が政務を執る庁舎のあった所は、従前より現在の前橋市元総社町と大友町にまたがる元総社町東端の地域がそれにあたると推定され、これが定説となっている。

郡はクニとも読むから、これが転じて郡衙=国衙となつたのではないかという説もある。しかし、群馬大学教授であった故尾崎博士は、郡衙（郡庁）の所在地であった所は御門とか帝という地名で残っているという。即ち、勢多郡柏川村月田字御門、新田郡新田町中江田字帝等である。^(註1)従って尾崎博士は松井田町の国衙については一言も触れてはいない。木下良氏（国学院大学教授）の説によると、律令初期の国衙は国の中央に位置し、律令制が衰退してきてから移転した国衙はずつ後退して規模も小さく国境に近い所にあるという。その上、国府、国庁は中央政府の正式呼称として用い、国衙はむしろ地方での用語として使用されたのではないか、と言っている。^(註2)

940年、平将門の乱によって上野国府は将門軍に攻め取られているから、この後の一時期、国庁として規模を縮小して上信国境に近いここ松井田の「国衙」の地に国庁を移したのではないか。だが、当地については考古学的にも文献的にも、民俗的にもここが「国衙」であったという何の証もない。しかし、愛知県松下町字国衙、山口県防府市佐波今字国衙、山梨県東八代郡御坂町字国衙等は皆それに尾張国、周防国、甲斐国^(註3)の国衙跡だという。この国衙は松井田町大字国衙と呼ばれ、字名として現存するのに何故に伝承の一つさえも無いのであろうか。

大字国衙の地は江戸時代には主として安中藩領に属し、高245石8斗余り、戸数59程で、旭神社（総鎮守）自性寺を持って立派な一村を形成していたのである。この村のほぼ中央を西から東へ推定東山道が縦貫している。そして東山道につくられたという一里塚が昭和20年代まで残っていた。この道はまた、天正18年（1590）8月、徳川家康が関東入国の際に通つて行った道でもある。

この辺りは須恵器片や大甕の破片が表採されて早くから注目されていた地域である。昭和59年から60年にかけて、町営住宅建設に伴う国衙森浦・朝日遺跡の発掘調査が行われた。この時、桑園の下に完全に埋没していた古墳2基が発掘され、耳環、金銅製飾付大刀、刀子等々の出土を見た。この発掘された古墳より北に道を隔てて九十九22号墳があり、南方50m程のところにある竹林中にも九十九37号墳がある。更に、この道を東進すると国衙古墳群や小日向古墳群等があって、この地が早くから開けていたことを示している。

〈布目瓦〉

布目瓦は既にご存知のように古瓦の表、または裏にあたる面に布目を残している瓦のことである。瓦を作る時に、瓦を一定の規格に合わせて製作したり、作業の能率化をはかるために木型が用いられた。この木型から粘土がたやすく剥がれるように木型の上に布を敷いて置いた。即ち、木型の上

に布を敷き、その上に粘土をのせ、この粘土を延ばしたり、叩いたり、押しつけたりして成形するので、この時に布との接触面に布目が付くというわけである。

では、このようにして作られた「布目瓦」は、年代的には何時のものなのであろうか。

石田茂作氏の研究によると、布目瓦の上限は飛鳥時代であり、下限は豊臣秀吉が造った京都の聚落第および伏見桃山城の瓦だ^(註4)という。更に石田氏は、古瓦にある布目は飛鳥白鳳時代は細かいといふ。これは、飛鳥白鳳の時代には瓦の需要が少なく、用いる土も粒子の細かなものを使用したので布も目のつんだ上等品を使ったのではないかと考察している。また、奈良時代から平安時代の初期にかけての布目は粗くなると云う。これは、黄麻の纖維を用いた為ではないかと見ているようだ。藤原時代から鎌倉時代になると布目は再び細かくなると云う。これは、奈良・平安時代の布地に使用した黄麻が毛脚が比較的短く、且つ硬く、細糸を得るのに適していなかったのに対し、藤原・鎌倉時代に使用するようになった布地は毛脚が長く、纖維もやわらかで細糸を得るのに便利な苧麻を用いるようになった為ではないか、と云っている。このため、藤原時代の布目瓦は纖維糸がやわらかで毛ば立ちがするので糸目が屈曲し易いと云う。鎌倉時代の布目も大体は藤原時代と同様だが、縦糸を細くして横糸をやや太くしているものが多いと云う。

一方、日本歴史大辞典(河出書房)では、平安時代以降布目の纖維が細くなる理由を次のように説明している。「平安時代以降、ようやく纖維が細く、しなやかになる。これは、此の頃からインド綿が移入された為といわれている」。国衙出土の布目瓦の布地に用いられた纖維が黄麻のものか、苧麻のものか、はたまたインド綿の纖維か、私には全くその纖別能力がない。ただ、本文46ページの図44No.6をご覧いただければ、布目がかなり「密」であること、縦糸より横糸の方が太いこと、布目に撓みがあること等はご理解いただけると思う。

上野の国分寺跡に散見される多くの布目瓦も、よく観察すると纖維の太さ、纏り目の粗密、撓みの有無等、布目の様相は決して一様ではない。それは国分寺が完成した時点で既にそうであったのか、後世、補修時のさし替え、または葺き替え等によって生じたものなのか。もし後者であるとすれば、同じ国分寺跡の布目瓦でも100~200年の年代差をもって見なければならないことになる。

以上のことから考察して、誠に大胆な推定ではあるが、当該布目瓦は上限を藤原時代、下限を鎌倉時代までと考えたい。

たった一片の布目瓦だが、この布目瓦の出土した意味は大きい。これを国府としての「国衙跡」に大きく一步近づくものとして位置付け、夏に今後の調査に積年の夢を託していただきたい。

(註1) 『群馬の歴史 (3)大化改新以後の上毛野国』 群馬県歴史研究会 1970

(註2) 木下良「国府跡研究の諸問題」 『人文地理』 第21巻第4号

(註3) 『歴史の道調査報告書～東山道～』 群馬県教育委員会 1983

(註4) 石田茂作「布目瓦の時代判定」 『考古学雑誌』 35号 1947